

聖書箇所・宣教題・・・使徒の働き12章18-25節 「私にではなく神に栄光を」

中心聖句・・・「すると、即座に主の使いがヘロデを打った。ヘロデが神に栄光を帰さなかったからである。彼は虫に食われて、息絶えた。」(23節)

人には、目に見えない神様よりも、目に見える権威を恐れてしまう傾向があります。けれども聖書は、本当に恐れなければならない方はどなたなのかを明確に私たちに教えています。

I 人に対する傲慢

A 「ヘロデ王は、教会の中のある人たちを苦しめようとしてその手を伸ばし、ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。」(使 12:1)とあります。このヘロデは自分の人気を得るために使徒たちを捕まえて殺したりしていました。それは教会に対する大きな迫害でした。

B ヘロデは、さらに自分の人気を得るために、次にペテロを捕らえて牢に入れました。すると、主の使いが現れ奇跡を行い、ペテロをその牢から出しました。ヘロデはペテロを殺すことに失敗することになり、大変な騒ぎになりました(18節)。

C 次にヘロデは、その番兵たちを取調べ、彼らを処刑することにしました(19節)。ヘロデは、教会の人に限らず、すべての人のいのちを我が物のように考えていました。自分には他者のいのちを取る権威があると、すべての人に対して傲慢になっていたことが分かります。

II 神に対する傲慢

A ヘロデの他者に対する傲慢はツロとシドンの人々に対しても及び、拍車がかかります(20節)。ツロとシドンの人々が食料を得ることができるかどうかは、ヘロデにかかっていました。ヘロデは彼らのいのちも自分自身が握っていると考えて傲慢になっていました。

B そのため、人々はヘロデの機嫌を取るために、あらゆる手段を用いていました。定められた日に、ヘロデが王服をまとい王座に着き、彼らに向かって演説をすることがありました。そのように人々は、ヘロデを自分たちの王として扱うことまでしていました。

C その演説中、集まった会衆は「神の声だ。人間の声ではない」と叫び続けていました(22節)。自分たちが生きるために、ヘロデをまるで神のように賛美してしまっている様子が描かれています。ヘロデは自分が神であるかのようにふるまい、神様に対して傲慢になっていたことが分かります。

III 神に栄光を帰する

A ヘロデは、自分が人のいのちを握っている神のような存在だと考えていました。また、自分こそが人から賛美される神のような存在だと考えていました。そんなヘロデに対して、まことの神様は正しいさばきを下しました(23節)。

B ヘロデは虫に食われて死ぬことになりました。その理由は「ヘロデが神に栄光を帰さなかったからである」と聖書は言います(23節)。栄光を受けるのは神様だけです。人に対して傲慢である人は、神様に対しても傲慢になり、決して神様に栄光を帰することはありません。

C この神様の正しいさばきにより、ヘロデは死ぬことになりました。それと同時に、「神のことばはますます盛んになり、広まっていった」(24節)とあります。神様は迫害されている教会を守り、教会を成長させてくださるお方です。この神様にすべての栄光を帰することができますように。

結論・・・ヘロデは、教会の人に限らず、すべての人のいのちは自分自身が握っていると考えて、すべての人に対して傲慢になっていました。また、ヘロデは自分が神であるかのようにふるまい、神様に対しても傲慢になっていました。栄光を受けるのは神様だけです。人に対して傲慢である人は、神様に対しても傲慢になり、決して神様に栄光を帰することはありません。神様は正しいさばきを下し、迫害されている教会を守り、教会を成長させてくださるお方です。この神様にすべての栄光を帰することができますように。